

# 先見経済

Management & Economic Information SENKEN KEIZAI Since1938

シリーズ・この国の未来

「昼間は会社で直接、間接的に社会に貢献し、  
アフター5は地域の問題に取り組む。  
こうした『二所懸命』が、これからは必要です」

神奈川大学経営学部教授 松岡紀雄  
聞き手／国民政治研究会理事長 田中克人

## 事業計画を達成させる!

～戦略を絵に描いた餅で終わらせないために～

エヌ・コンサルタンツ代表取締役、中小企業診断士 西村健一

特集

短期集中連載・第2回

## 徹底研究「確定拠出年金」って何だ!?

中小企業診断士、1級企業年金総合プランナー 細入 徹

好評連載

安岡正篤にみる東洋の叡智 神渡良平

時論 初代内閣安全保障室長 佐々淳行



今回のゲストは映画監督の龍村仁さんです。龍村監督は「地球（ガイア）」はそれ自体が生命である」というガイア理論に基づいて、多様な職業に就く、何か素晴らしいことを成し遂げた人々の体験を取材したドキュメンタリー映画「地球交響曲（ガイア・シンフォニー）」の制作で知られています。龍村監督が、この映画に込めた想いと、これからの時代が必要になるであろう視点を今号と次号に分けて伺います。



Photo/高取剛充

## 龍村 仁

映画監督

聞き手/山口哲史 株式会社プロ・アクティブ代表

やり切つて、

後は明け渡す状態になると、  
今の自分を超えた力が働く

人間は想像したことを現実にする

大いなるつながりの中で  
人間は生かされている

山口 龍村監督とは、現在、第六番まで完成している「地球交響曲 第三番」を自主上映をさせてもらったのがご縁です。さて、地球交響曲を撮りはじめた理由は何ですか。

龍村 「地球は一つの生命体であり、私たちはその一部分として生かされている」をテーマに、これからの時代にとっても重要なメッセージを持っているかもしれない、世界中の多様な方を紹介するドキュメンタリーを、世間の人たちは求めている。そんな〈見えない流れ〉が絶対にある、という確信があったからです。

山口 なぜ、そのテーマを選んだのですか。

龍村 別に、「ある日神様の啓示があった」とか「とてつもない人生の危機や事故、転機があった」ということはありません。自分が職業とする「映像」という環境の中で、必死に生きていくうちに自然と表現のテーマになったのです。

山口 自主上映をした後、コンサートのように、観客の拍手が長い間止まなかったのが、とても印象的でした。

龍村 映画では、監督など制作側からのメッセージというスタイルが多いものです。でも、地球交響曲は、観客一人ひとりとの間で双方向的なクリエイションを起こしたいとの想いを込めています。だから、コン



## 【ホスト】山口哲史 Yamaguchi Tetsushi

1961年兵庫県生まれ。関西学院大学商学部卒業後、リクルートなどを経て90年、現(株)プロ・アクティブの前身のファイルド・アクティブを設立。竹100%でできた繊維など自然でピュアなエネルギーを活用した「人を自然に輝かせる(ラディアンズ)」力のある健康、美容商品の企画・販売を手掛ける。社内外ともに「ガッツさん」の愛称で親しまれている。

<http://www.pro-active.co.jp>

サートの様に、映画を観ることを通して、自分の心の中にあるものが発見されるといふか生まれていくようなことが起こる。だから、そういう現象が起こるのでしよう。

**山口** では、観客は、何かに目覚めたり、気づく喜びを感じていると?

**龍村** 地球交響曲の出演者で、例えば14世ダライ・ラマ法王や海洋冒険家のジャック・マイヨールなどに対して、観客は特別な人だと思ってしまう側面がある。けれど、私自身には、「35億年の歳月を費やしてガイア(地球)が生み出した人間は皆同じ」という哲学という思想がある。それに、特別に見える人も、実際に会ってみると本当に皆、普通の人。だからこそ、その普通の人があるとき素晴らしいことを成し得ることに、人は感動するんです。では、なぜ、自分とまったく変わらない普通の人が何かを成し得ることができたのか——そう考えることで、観られた方は自分の中にも、この人と同じことを成し得る何かがあることに気づく。そんな喜びが、地球交響曲にはあるのだと思います。

**山口** 人間は、深い部分では本質的につながっているということですか。

**龍村** はい。言葉で言うと言教じみて嫌なんですけど、人は、自らの努力や個性など、

自分自身の力で生きていくことは紛れもない事実です。けれど、同時に、何か大なるつながりの中で、自分は生かされているといった感覚は、すべての人が共通して感じているのではないのでしょうか。

**山口** ところで、最初の第一番が完成したときの周りの反応はどうでしたか。

**龍村** 第一番は1991年に完成したのですが、最初は試写会をしてもお客さんは来ず、映画館からも声がかからなかったため、1年間はお蔵入り状態でした。でも、なぜ、お客さんが来ないのかは分かっていました。普通の映画とは異質だし、有名な俳優も出ないわけですからね。それにストーリーも、「ストーリーはなくて、地球は大きな生命体で、その一部として我々が生かされている」と聞かされたところで、お客さんにとっては、訳が分からなかったでしょう。だから、とにかく上映してくれる映画館を探しました。そうしたら、都内のある映画館が3000枚のチケットを先に買い取る条件で、2週間上映すると。

**山口** 厳しい条件ですね。

**龍村** でも、できるできないではなく、3000枚のチケットを売るしかありません。チケット販売は、映画監督のやることではないと考える人もいますが、それは所詮、己がつくった監督像に過ぎず、格好をつけているだけの話です。私の場合は、知り合いのつてを頼ったり、いろんな同窓会に出席したりして、人の世話になりながら30

00枚のチケットを売り切った。こうして92年に第一番がスタートしたのです。

## 本当のスポンサーは観客一人ひとり

**山口** 次の第二番、三番は京セラの稲盛名誉会長がサポートされていますが、どのような経緯があったのですか。

**龍村** 第一番のディストリビューションとしては都内だけでは足りないのと、京都でも行ったのですが、そのときに、稲盛さんにチケットを渡したら初日に会社の幹部の方を連れて観に来てくれたんです。そこで、次回作のサポートをお願いしたら資金を出してくれることに。けれど、稲盛さんのすごいところは、こう言ったんです。「私はいくことをしているからお金をあげましょう」という考えは一切ない。こういう映画が経済的に循環しないはずがない。でも、現在の経済システムで循環しないのならば、違うシステムを考えて私に示してくれ。それで私が納得しない限りお金は出さない」。私はこの言葉に感動しました。要するに、世の中ですでに確立された経済システムに乗る方法もあるけど、既存の価値観では新しいことができないこともある。ならば次に適合する新しいシステムそのものを自ら創造するようでないか、新しい現実を動かさない。これが稲盛さんの哲学なのでしょう。

**山口** 実際、資金は返さなくてはいけないですからね。しんどいことです。

人間は本質的などころでつながっている